

身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選択*

杉浦 宏季^{*1}, 橘 和代^{*2}, 横谷 智久^{*1}, 野口 雄慶^{*1}

Examination of the Factors of a Sense of Shame in Bodily Expression Activity

Hiroki SUGIURA^{*1}, Kazuyo TACHIBANA^{*2}, Tomohisa YOKOYA^{*1}, Takanori NOGUCHI^{*1}

^{*1} Department of Industrial Business and Engineering

^{*2} Ohara College of Sports, Medical, Childcare, and Welfare

Many people are ashamed of bodily expression activity. This study aimed to examine the items that effectively contributed as factors to a sense of shame in bodily expression activity. Eleven items were classified, and 212 healthy students [mean age, 21.0 years; standard deviation (SD), 4.9 years; male, N = 101; female, N = 111] responded to these items through “Yes” or “No.” In addition, when there was a newly effective item, a free description of the item was demanded. Consequently, the effectiveness of the selected items, the changing expression of the items, and the need to examine new items were observed.

Key Words : Bodily Expression Activity, A Sense of Shame, Healthy Students

1. 緒 言

近年、地面での座り込みや電車内での飲食や化粧、歩きたタバコなどの行為について、羞恥心を感じていない者が増加している。菅原⁽¹⁾は、羞恥心を「周囲から批判されないようにするための心の警報装置」と定義している。つまり、羞恥心は、ヒトにとって有するべき感情であり、社会のルールを守る上で重要なものと捉えることができる。

平成 24 年度から中学校では身体表現（ダンス）の授業が必修化された⁽²⁾。その背景には、「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現させるため、生徒に多くの領域の学習を十分に体験させることが重要」と考えられるようになったこと、「その体験をもとに生徒自らが探求したい運動を選択できるようにさせることが重要」と考えられるようになったことなどが挙げられる。しかし、酒向ら⁽³⁾は、教員と中学生の双方とも男女を問わず身体表現活動について羞恥心を有している現状にあると報告している。ここでの羞恥心は、「恥ずかしく感じる気持ち」であり、上述した羞恥心とは異なり、社会のルールを乱すものではない。しかし、教員が身体表現活動に対して強い羞恥心を有していた場合、生徒に適切な授業を提供することはできない。同様に、指導者を目指している生徒や学生においても、強い羞恥心により、将来の選択肢を狭めてしまうことが考えられる。また、自身の感情を無理に抑制できたとしても、サービスの提供やパフォーマンスの発揮が十分でない可能性がある。つまり、このケースに関しては羞恥心を除去あるいは軽減させる必要がある。しかし、羞恥心の要因に関する研究は少なく、そのための指導法は確立されていない現状にある。

心理学の研究法は、「観察によるもの」および「言語を媒介するもの」の2つに大別される⁽⁴⁾。前者は、実験を含め「見ること」により人間を理解しようとするもの、後者は、「聞くこと」により理解しようとするものであり、

* 原稿受付 2015 年 2 月 25 日

^{*1} 産業ビジネス学科

^{*2} 大原スポーツ医療保育福祉専門学校（〒910-0005 福井市大手 2-9-1）

E-mail: sugiura@fukui-ut.ac.jp

面接法、質問紙法、および検査法の 3 つに分類される⁽⁴⁾。身体表現活動時における羞恥心を感じる要因を一般化するためには、人間の行動に影響を与える様々な背景的要因（動機、欲求、期待、過去経験）などについて捉えることができる質問紙法が有効と考えられる。羞恥心の要因に関する調査を実施し、対象者の心境を整理していくことで、身体表現活動における羞恥心を除去あるいは軽減するための指導法が確立できるかもしれない。

本研究は、質問紙法により、身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目を選択することを目的とした。

2. 方 法

2.1 対象者

福井県に在住する青年学生 223 名を対象に身体表現活動における羞恥心に関する質問紙法を実施した（回収率：100%）。回答内容を吟味（記入漏れ、同一質問項目に対し異なる回答、等）し、11 名のデータを除外し、212 名（21.0±4.9 歳）のデータを有効と判断した。なお、男性は 101 名、女性は 111 名であった。

2.2 調査方法

本研究では、大学あるいは教育系専門学校の教員 3 名が内容妥当性を検討し、羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選定を行った。上記の対象者は、「身体表現活動で羞恥心を感じる理由について、次の 11 項目（Table 1 参照）は適切だと思いますか」の質問に対し、それぞれ「a. 適切である」および「b. 適切でない」のいずれかで回答した。また、新たに有効な項目がある場合は提案を求めた。

Table 1 各質問項目に対して「適切」と回答した者の度数およびその比率

質問項目	度数	比率
1. 過去に失敗した経験があるから	62	29.2%
2. 過去に笑われた（馬鹿にされた）経験があるから	56	26.4%
3. 過去に人が失敗したのを見たから	34	16.0%
4. 自分が注目されるから	94	44.3%
5. 声色や声量、音程、リズム感などに自信がないから	83	39.2%
6. 容姿や自分に自信がないから	91	42.9%
7. 失敗が許されないから	49	23.1%
8. プライドが高いから	22	10.4%
9. 経験が少ないから	122	57.5%
10. 人が自分よりも上手だから	72	34.0%
11. 性格上の問題（ネガティブ・根暗・陰湿など）	92	43.4%

3. 結 果

Table 1 は、各質問項目に対して「適切である」と回答した者の度数およびその比率を示している。「1. 過去に失敗した経験があるから」を適切と回答した者は 29.2%、「2. 過去に笑われた（馬鹿にされた）経験があるから」を適切と回答した者は 26.4%、「3. 過去に人が失敗したのを見たから」を適切と回答した者は 16.0%、「4. 自分が注目されるから」を適切と回答した者は 44.3%、「5. 声色や声量、音程、リズム感などに自信がないから」を適

切と回答した者は 39.2%, 「6. 容姿や自分に自信がないから」を適切と回答した者は 42.9%, 「7. 失敗が許されないから」を適切と回答した者は 23.1%, 「8. プライドが高いから」を適切と回答した者は 10.4%, 「9. 経験が少ないから」を適切と回答した者は 57.5%, 「10. 人が自分よりも上手だから」を適切と回答した者は 34.0%, 「11. 性格上の問題 (ネガティブ・根暗・陰湿など)」を適切と回答した者は 43.4%であった。

Table 2 は, 自由記述回答により挙げられた項目を整理したものである。挙げられた項目は, 「評価」, 「自信」, 「注目」, および「性格」の 4 つのカテゴリーに分類された。

Table 2 自由記述回答により挙げられた項目

カテゴリー	項目
評価	周りに評価されるのが怖い
	周りにどう思われているか不安
	周りに笑われるのが怖い
	自分のイメージを崩されたくない
	好きな人や友人に嫌われたくない
	人から良く思われたいという感情
	期待を裏切りたくない
自信	練習不足
	慣れていない
	失敗が怖い
	自信がない
	実力がないゆえの劣等感
注目	人の視線を気にする
	人の視線に慣れていない
	人の視線が怖い
	多くの人に見られる
	異性と目が合う
性格	あがり
	緊張
	初対面
	人見知り
	人前が苦手
	滑舌が悪い
	マイナス思考

4. 考 察

本研究の目的は, 212 名の青年を対象に身体表現活動における羞恥心に関する質問紙法を実施し, 羞恥心の要因の検討に有効な質問項目を選択することであった。杉浦ら⁽⁵⁾の報告を参考に, 大学や教育系専門学校に所属する教員 3 名が内容妥当性を検討し, 羞恥心の要因に関する項目の選択を行った。また, 鎌原ら⁽⁴⁾と出村⁽⁶⁾, 自由記述形式による質問紙の実施は項目作成において重要と述べていることから, 本研究では自由記述の調査も実施した。

質問紙法の結果, 過半数の者が選択した項目は「経験の少なさ」のみであった (57.5%)。羞恥心と経験の有無には密接な関連があることが示唆された。また, 「自身への注目 (44.3%)」や「性格の問題 (43.4%)」, 「自信のなさ (39.2%, 42.9%)」に関する項目は約 4 割の者が選択していた。つまり, 羞恥心の有無あるいは程度には,

過去の経験や自信、周囲からの評価などが大きく影響している可能性がある。自由記述においても同様の傾向があり、周囲からの評価（周りに評価されるのが怖い、周りにどう思われているか不安、周りに笑われるのが怖い、自分のイメージを崩されたくない、好きな人や友人に嫌われたくない、人から良く思われたいという感情、期待を裏切りたくない）や自信（練習不足、慣れていない、失敗が怖い、自信がない、実力がないゆえの劣等感）に関する項目が多く挙げられた。酒向ら³⁾の調査では、約5割の者が「人に見られる」ことに関して羞恥心を有していたが、本研究においても同様の結果であった。「人の視線が気になる」や「人の視線に慣れていない」といった回答もあったことから、少人数の前で練習や発表することから始め、次第に人数を増やしていく必要があるだろう。今後、身体表現活動における羞恥心を除去あるいは軽減していく上で、学生には多くの経験を積ませ、自信をつけさせることが望まれるだろう。その際、指導者としての声掛けや導入方法に関しては、学生の性格や経験などを考慮した心理学的なアプローチを導入が求められるかもしれない。

一方、本結果において「過去の経験により羞恥心を感じる」と回答した者は少なかった（16.0%–29.2%）。また、「失敗が許されない」や「プライドの高さ」に関する項目に回答する者も少なかった（23.1%, 10.4%）。これらの項目に関しては、今後、更なる検討（表現の変更、質問項目の削除）が必要であろう。

人見知りか否かの項目に関して、本研究の対象者の29.2%は「かなり人見知り」と回答し、49.1%の者は「まあ人見知り」と回答していた。これは自覚的な回答であることから、その程度には個人差があるものの、併せて78.3%の者は人見知りの傾向にあった。自由記述においても、「人見知り」や「人前が苦手」といった項目が挙げられたことから、今後、人見知りの有無やその程度と羞恥心の関連についても検討する必要がある。いずれにせよ、身体表現活動時における羞恥心には、「評価」、「自信」、「注目」、および「性格」のカテゴリーに関する項目が関与していることが示唆された。今後は、更なる大規模調査を実施し、対象者の過去および現在の経験とこれらの項目の関連性を検討していく必要がある。それを達成することで、身体表現活動における羞恥心を除去あるいは軽減するための指導法の提案が可能になるかもしれない。

5. 結 語

本研究は、212名の青年を対象とし、身体表現活動における羞恥心の要因に関する質問項目の選択、新たな質問項目の選定を目的とした。その結果、我々が選択した質問項目の有効性、表現の変更が必要な質問項目の存在、新たな質問項目の必要性などが明らかにされた。

文 献

- (1) 菅原健介, 羞恥心はどこへ消えた?, 第1版 (2005), pp. 14, 光文社.
- (2) 新学習指導要領に基づく中学校保健体育科における「ダンス」リーフレット作成委員会, 一新学習指導要領—中学校保健体育【ダンス指導のためのリーフレット】, 第1版 (2011), pp. 2, 文部科学省.
- (3) 酒向治子, 永田麻里子, 出原智波, 角南順子, 猪崎弥生, “教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス”, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, Vol. 152 (2013), pp. 45-49.
- (4) 鎌原雅彦, 宮下一博, 大野木裕明, 中澤潤, 心理学マニュアル 質問紙法, 第1版 (2013), pp. 11, 北大路書房.
- (5) 杉浦宏季, 出村慎一, 辛紹熙, 橘和代, 徐寧, “体格特性に基づく肥満児の判定指標の作成”, 教育医学, Vol. 57, No. 4 (2012), pp. 303-310.
- (6) 出村慎一, 健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法, 第1版 (2007), pp. 73, 杏林書院.

(平成 27 年 3 月 31 日受理)